



Emergency Watch

No.66 Jun. 2016

神戸こども初期急病センター

2016年5月受診者数

2497人



【疾患頻度】

1. 急性上気道炎・咽頭炎	: 779人
2. 感染性胃腸炎	: 262人
3. 気管支喘息・喘息性気管支炎	: 179人
4. 気管支炎	: 127人
5. 感冒	: 88人

最近はじめじめとした天候が続き、汗ばむような暑い日も増えてきましたが皆様いかがお過ごしでしょうか？
気温が高くなるにつれて、子ども達は薄着になり肌の露出が増える一方で、虫の活動が活発となります。そこで今回は虫さされ(虫刺咬症)について取り上げたいと思います。

虫刺咬症で問題となるのは以下の3つです。

- ① 体内に入る毒とそれに対するアレルギー反応
- ② アナフィラキシー
- ③ 感染症

<①：体内に入る毒とそれに対するアレルギー反応>

虫さされ後に赤くはれたり、痒みが起こる原因です。症状がすぐに出てくる即時アレルギー型と、刺されてから数日後に症状が出る遅延アレルギー型があります。どちらも症状は軽度のことが多く、家庭でも対応が可能です。石鹸と流水で患部を洗い、アイスパックや氷嚢で患部を冷やし、必要に応じて虫さされ用の軟膏(かゆみ止め・炎症止めの抗ヒスタミン薬やステロイドが配合されています)を塗布します。しかし、症状が重い場合や長く続く場合は無理せず医療機関を受診しましょう。

<②：アナフィラキシー>

即時型アレルギーの最重症型で、複数回のハチ刺咬症に多いです。刺傷から数十分以内に全身に広がる発疹や痒みを認める事が多く、その後呼吸困難や咳嗽などの呼吸器症状、嘔吐・腹痛・下痢などの腹部症状などを認め、重症化すると意識障害・循環障害を来し死亡に至ります。早急な治療を必要としますので、呼吸器症状・腹部症状を認める場合や、胸痛・動悸などの循環器症状がある場合はすぐに医療機関を受診することが必要です。

<③：感染症>

虫刺咬症が関連する感染症には、蚊が媒介する日本脳炎・デング熱(Emergency Watch No.63, 45をご参照下さい)や、ダニによるツツガムシ病、リケッチア、重症性血小板減少症などがあります。いずれも頻度は稀ですが、虫刺咬症により発熱を伴う場合は医療機関への受診が良いでしょう。また、掻きむしることによりとびひ(伝染性膿痂疹)を来す事もあるので、①への対応にあるように刺傷部を清潔に保ち、痒みを抑える事は重要です。

<最後に>

他の病気と同様に虫刺咬症においても**予防が最も重要です**。草むらなどに入る時は長袖・長ズボンなどを着用し、露出部位には虫除けスプレーなどの使用がおすすめです(虫除けの一部製品は乳幼児に使用出来ませんので注意しましょう)。

たかが虫さされですが、時にムシ出来ない事態となることもありえるので、しっかりと予防してこれからの季節に臨みましょう。

